任と社会的な責任が言及されていることである．とりわけ社会的責任という言葉が気になり，考えさせられた．個人の意思決定を重視しながらも，その決定を合理的なものとし，大切な家族にとって理解可能なものとするとともに，人間の尊厳を大切にする社会を維持していくことはできるだろうか．そして生命の危機を救うとともに，救われた人々のQOLを支えることにどのように貢献できるか．

全体で25分の長さだが，学習目標が絞られており，内容もちょうどよい分量であった．登場人物の学生との質疑応答も的を得たものであり，学習を深めるものとなっている．アニメという手法については，歴史を研究するものとしては可能なかぎり本物の史料に触れてもらいたいと思うが，適した史料がない場合，プライバシーの問題や所蔵者の意向により利用許可が得られにくい場合，被害状況など残虐で負の影響を与えることが予想される場合の表現にはよいと思う．

同じシリーズの「アニメでわかる看護の歴史」については，導入編としてはよいが，通史を20分で説明するのは難しかったのではないかと感じた．看護においても歴史を学ぶことが有効なテーマがいくつかあると思われる．是非，看護の実践，教育，管理などテーマ別の作成についても検討してもらいたい．

（川原由佳里）

［丸善出版（映像），〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17，TEL. 03（3512）3252，2021年11月，DVD・配信，38,000円＋税］

香西豊子 監修
『ぼくらの感染症サバイバル――病に立ち向かった日本人の奮闘記――』

2020年から始まった新型コロナ感染症COVID-19のパンデミックで，社会も経済も，そして人々の生活も大きな影響を受けてきた．このような病気の蔓延は大きな不幸ではあるが，人々が医学・医療のあり方に関心を向けるきっかけにもなった．感染症の歴史を扱う書籍も次々と，これぞとばかりに出版されている．医史学の研究者として，医学の歴史から学んできたことを世に伝えたいという思いも湧いてこよう．

一般向けに書かれる啓蒙的な書籍を書くのは，最先端の研究成果をもとに書かれる専門的な書籍を書くよりも楽だと思う人がいるかも知れない．しかし私自身が，最先端の研究論文や高度な専門書から，医学生やさまざまな種類の学生向けの教科書やら，一般向けや子供向けの親しみやすい書物の執筆や監修に数多く携わってきて言えることは，書物を書くことの難易度に大きな差がある訳ではない．その書物が成功するか否かは，対象とする読者にふさわしい内容が書けるかどうかにかかってくる．

医学史を扱う一般向けを意図した書物がこれまでなかった訳ではない．拙著『医学全史』（ちくま新書）もそうだし，新書など一般向けの書籍は，やや肩に力の入った知的好奇心の旺盛な人向けというところだろう．肩の凝らないものとしては，茨木保『まんが医学の歴史』（医学書院）があるが，著者は医史学の専門家ではない．

本書『ぼくらの感染症サバイバル――病に立ち向かった日本人の奮闘記――』は，プロローグ「感染症のきほん」に続いて1章「古代・中世（飛鳥～室町時代）の感染症サバイバル」，2章「近世（江戸時代）の感染症サバイバル」，3章「近代（明治～大正時代）の感染症サバイバル」，4章「現代（昭和時代）の感染症サバイバル」，5章「現代（平成～令和時代）の感染症サバイバル」とエピローグ「終わらない感染症サバイバル」からなる．それぞれ数頁の漫画に続いて見開きで解説がつく形の，これぞ一般読者や中高生を視野に入れた，フレンドリーで上質な本である．このような本は容易に一人で作れるものではなく，監修をする人，マンガを描く人，原作と執筆をする人，企画編集をする人など多数の信頼と協力の下に始めて実現

するものである．監修をされた仏教大学の香西豊子さんは，『流通する「人体」―献体・献血・臓器提供の歴史』を2007年に，また最近は『種痘という〈衛生〉：近世日本における予防接種の歴史』（2019）を上梓された気鋭の医史学者である．

歴史上の医学や医療についての深い研究も大事ではあるが，独りよがりに陥るリスクもない訳ではない．世の多くの人に医学史の知見を伝えることも，医史学者の大切な仕事だと思う．

（坂井　建雄）

［いろは出版，〒606-0032 京都市左京区岩倉南平岡町74番地，TEL. 075（707）1168，2021年12月，A5判，192頁，1,500円＋税］

書籍紹介

香西豊子 著
『種痘という〈衛生〉――近世日本における予防接種の歴史――』

本書は，先行する種痘史研究・資料を，著者独自の視点から再検討・再構成したものである．研究蓄積の厚い在村蘭学やそれぞれの地域の医師たちの役割があまり視野に入っていない点は残念であるが，池田家の分析をすすめるなど従来の種痘史研究にない視点があり，「種痘の歴史」は単なる「新しい医療技術の輸入の歴史」ではないことに気づかせてくれる著作といえよう．

なお，本書の内容の詳細な検討については，本会会員の海原亮による精緻な書評が存在し（『歴史評論』848号，2020年12月），そのなかで海原が既に本書の議論の分かれる部分をひとつひとつとりあげ網羅的に分析しているので，そちらを参照されたい．

ここでは，以下に目次を紹介しておくに留める．

序章　「日本に於ける疱瘡の沿革」を記述する
　第一節　鷗外の追憶，京水の幻影
　第二節　種痘という〈衛生〉
　第三節　本書の構成
第一章　疱瘡の病像
　第一節　疱瘡の歴史的現在
　第二節　日本列島における疱瘡像
　第三節　疱瘡の「地方」的展開
第二章　疱瘡の医説
　第一節　医と「天命」
　第二節　人痘種痘術の実践
　第三節　命題「八丈島無痘説」
　第四節　断毒の目論見
　第五節　治痘の究竟
第三章　種痘針の政治学
　第一節　国土と人別
　第二節　牛痘の「取寄」と分配
　第三節　「百分の一」の倫理
　第四節　幕末蝦夷地の強制的「全種痘」
終章　あばた面の近代

（松村　紀明）

［東京大学出版会，〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29，TEL. 03（6407）1069，2019年12月，A5判，676頁，8,800円＋税］